

# 野鳥の森へ、 ようこそ

(株)ピッキオ

エコツアーは、自然や文化にふれあいながら学ぶ新しい旅のスタイルです。「エコジン」編集部では、話題のエコツアーに参加してみました。

写真／石原敦志



ピッキオは、様々なフィールド調査に基づいたエコツアーへの取り組みが評価され、2005年に第一回の「エコツーリズム大賞」（環境省）に選ばれている。

「ツルルル…、スピスピスピ…」  
耳を澄ますと、小鳥のさえずりが木々の上から聴こえてきた。

「春の訪れを告げる、ミソサザイの歌声です。あの美声の持ち主に今日は会えるといいですね」

ガイドの小林菜々恵さんの後について、国設軽井沢野鳥の森を歩く。まだ新緑の季節ではないが、あと数日もすると渡り鳥の数が増え、森は小鳥たちの歌声に包まれるという。毎朝、ピッキオはこの森をフィールドに10年以上もエコツアーを続けてきた。

小鳥を探して歩きながら、小林さんは様々な生き物の痕跡を教えてください。カモシカの足跡、獣道、リスのかじったクルミの殻…。いつもなら見過ごしてしまう、生態系のディテールだ。

池のほとりでオタマジャクシを見

つけると、面白いエピソードを話してくれた。彼らのその後を知りたくて、数匹の蛙に発信機をつけて森に放した。そのうちの1匹にアベルがいた。1年目と2年目、アベルからの発信音は山の斜面から聞こえてきた。しかし3年目、なぜか木の上に設置された巣箱から聞こえてくる。不思議に思ったスタッフがその中を調べてみると、2羽のフクロウの雛がいて、その脇に発信機だけが残っている。どうやら、親鳥に運ばれたアベルは雛たちの餌にされてしまったようだ。

「これが森の現実なんです。それぞれの生き物たちが繋がりが合いながら、

私たちが今いるこの森の生態系が作り上げられているんです」

熊が登ったとき樹皮につけた爪痕を示しながら、この森にいたシオリという熊の話もしてくれた。ある日、ごみ捨て場で人間の食べ物を見つけ、それを食べてしまった。その味を覚えてしまったシオリは、ごみ捨て場を漁るようになった。そして台所にも侵入するようになった。2晩も続けて住宅を襲ったシオリは、ピッキオのスタッフの手で止むなく処分された。なんとも切ない話ではないか。ヒトと野生動物との関係はどうあるべきか——そんな問題を深く考えさせられた。

「ガイドは、フィールド調査によって得られたデータに基づいて、科学的な説明をするように心がけています」とピッキオの代表取締役社長の南正人さんは言う。「可愛いとか、可哀想だとか、人間の勝手な思いこみによって生き物を捉えるのではなく、森が生態系の微妙なバランスの上に営まれている事実を知ってもらいたいからです」

2時間程のツアーだったが、森から戻ってきた時には、自然に対する感覚が格段に上がっていた。

株式会社ピッキオ  
〒389-0194  
長野県北佐久郡軽井沢星野  
ネイチャーツアーのお問い合わせ  
電話 0267-145777  
e-mail: info@picchio.co.jp  
URL: http://www.picchio.co.jp



エコジーン・レポート

エコツーリズムのススメ

# 都心から1時間の、 なつかしい里山へ

埼玉県飯能市



右上／町田さん宅の庭に咲く片栗の花。  
中央／都会では最近みることのできない野草が沢  
山生えている町田さんの畑。昔、つくし摘みに夢中。  
左／古民家の庭で、代わる代わる餅をつく。エコ  
ツーリズム推進室の大野さんが、餅つきをお手伝い。

まだ肌寒い土曜日の午前9時。「本日はようこそいらっしゃいました。今日は、この土地の魅力を皆さんに身体全体で味わっていただければ、と思っています」という主催者の町田雅子さんの挨拶と共に、エコツアー「古民家に来てみんか」が始まった。

環境省のエコツーリズム推進モデル地区に指定された埼玉県の飯能市は今、里山の自然を気軽に楽しめるさまざまなエコツアーを地元の人々が中心となって開催し、注目を集めている。町田さんが地元の名栗山人会と共に主催するエコツアーは、築120年の歴史を持つ町田さんの自宅で、地元で採れた材料を使った料理を楽しむ、というもの。おいしい料理のとりこになった女子高生の常連さんもあるほどの人気で、3回目を迎える今回は、下は2歳から上は60代まで、総勢20人近くの参加者が集まった。

ツアーはまず、近くの峠までの散策から始まる。「あそこに咲いている可愛らしい花が、片栗です。この根っこが、片栗粉になるんですよ」。のんびりと歩きながら、町田さんが道沿いに生える植物について、一つひとつ丁寧に説明していく。

道沿いに広がる林は、かつて飯能が杉や檜の産地だった証拠だ。国産の木材価格が低下してしまったため、今では山林の手入れが難しくなっている、という説明を聞いて、参加者は一様にうなずく。ツアーを手伝う飯能市エコツーリズム推進室の大野裕司さんは「里山の身近な自然の魅力を皆さんに知ってもらいたい。同時に地元の問題を知り、共有していただければと思います」と語る。散策から帰ると、いよいよツアーのメインイベント、よもぎ餅づくり



3月2～4日に岐阜県白川村で開催された「全国エコツーリズム大会 in 白川郷」(全国エコツーリズム大会 in 白川郷実行委員会主催)の参加者たち。写真提供/日本エコツーリズム協会

NPO法人日本エコツーリズム協会  
〒141-0021  
東京都品川区上大崎2-24-9  
アイ・ケイビル4F  
電話 03-54373080  
e-mail: ecotourism@illes.or.jp  
URL: http://www.ecotourism.gr.jp

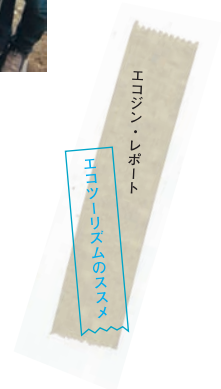
# エコツアーで、身近な自然を見直そう！

1998年に誕生したNPO法人日本エコツーリズム協会は、エコツーリズムの普及・啓発活動において、中核的な役割を果たしてきました。理事の海津ゆりえさんに、エコツーリズムの意義について聞きました。

エコツーリズムという言葉が最初に使われ出したのは、1970年代の後半です。中南米を旅行する欧米系の若者たちが、訪れた地域の環境にダメージを与えずに行う旅のスタイルを「エコツアー」と言い出したのが始まりです。1980年代に入ると、国際社会でも「持続可能な観光」という考えが広まりました。例えば、ハンティングで野生生物を殺してしまうのではなく、野生動物を見るツアーを普及させて動物を守りながら観光業を持続し、そこからの収益で地域振興を行っていくという考え方です。そこには、地域の活性化のための経済手段として観光をとらえていこうという願いが込められています。

日本でエコツアーが始まったのは、1989年の小笠原ホエールウォッチングが最初です。1992年頃からエコツアーを実施する民間業者が西表島や屋久島などで活動を開始しました。エコツアーの特徴というのは、まずガイドがいることです。地域に関して詳しい情報をもつガイドによって、その地域固有の自然や文化のあり方に触れることができます。二番目は楽しいこと。エコツアーは勉強会ではありませんから、あくまで楽しくなくてはなりません。三番目は、保全を図ること。いわゆる自然体験ツアーとの違いは、エコツアーは結果的にその地域の文化や自然の保全に繋がっていくということなんです。

現在行われているエコツアーは、大きく三つに分類されます。原生的な自然地域で行われるもの、多くの来訪者が訪れる観光地で行われるもの、そして里地里山の身近な自然、生活文化を活用したものです。エコツアーというと、大自然型を想像しがちですが、最近



上4点/自分の手で自家製あんこを包んだよもぎ餅は、格別な味。  
右下/家の周辺に自生する植物について説明する町田さん。

に突入。生まれて初めての餅つきに、子ども達は大喜びだ。自家製のあんこを包んだ餅を頬ばると、新鮮なよもぎの香りが漂ってくる。お腹が落ち着いたところで、昼ご飯の食材を探しに町田さんの畑へ。つくしやよもぎ、フキノトウなど、春の野草摘みを楽しんだあとは、山人会のメンバーが用意してくれる豪華な昼ご飯が待っている。摘んできた野草の天ぷらや、自家製味噌で作ったけんちん汁、辛味大根を合わせたつきたての餅……。古民家の縁側に座りながら、地元の幸のやさしい味を堪能する。「まだまだありますから、どんどん食べてくださいね」。町田さんの声で、皆次々とおかわりの列に並び、自然と参加者同士の会話もはずみ、ゆったりと時間が流れていく。満腹になるまで名栗の自然の恵みを味わって、本日のエコツアーは終了。都心からたった1時間たどりつけるふるさとが、ここにはあるのだ。

飯能市エコツーリズム推進室  
電話 042-97312123  
e-mail: eco2@city.hanno.saitama.jp  
URL: http://hanno-eco.com/index.html